第 15 回人類学関連学会協議会（CARA）合同シンポジウム

「性差」

・日時　2020 年 12 月 13 日（日）　13 時～17 時
・オンラインで開催

【開催にあたって】

人類学関連学会（CARA）は、日本人類学会、日本生理人類学会、日本文化人類学会、日本民俗学会、日本霊長類学会（五十音順）の５学会によって構成される組織である。これまで、それぞれの手法で取り組んでいる５学会が、合同シンポジウムで分野の壁を越えた対話を行うことにより、「人類」それ自体を研究対象にするという大きな視点に基づいて、成果の共有と発信に努めてきた。今回の合同シンポジウムでは、5 学会それぞれの立場からの研究蓄積があり、「人類」にとっての基本的な課題でもある「性差」をテーマに設定した。

「性差」が学問のみならず社会的な課題となって久しい。性差は大きく生物学的、心理的、社会的に区別することができるが、当然のことながらそれぞれは密接に関連している。男女の生物学的な区別と、その社会的・文化的な役割の関係についてはこれまで多くの領域から研究がすすめられ、近年ではトランスジェンダーなど男女という区別に収まらない問題も議論されている。

この「性差」という古くて新しい課題について、それぞれの学会から最新の成果をもちより、それぞれの理解を深め、議論を展開していくことは、人類学関連学会のそれぞれにとっても有意義であるとともに、大きな社会性・現代性を有するものといえるだろう。今回の合同シンポジウムでは、チンパンジーの具体的な行動からみた性差、同性カップルによる出産・子育て、高齢者の寿命・病気・老化への適応と性差の関係、近世の絵画における胎児の成長の可視化や性別に関する俗信、人骨からみた遺伝的性差と社会的性差など多様な話題が提供されるが、それぞれに共通するのは性差とは何かという強い問題意識であろう。それぞれの学問領域の方法による研究事例を持ち寄り、その到達点を相互理解することによって、共通点と独自性を探り、さらには今後の「性差」の在り方についても議論を深めていければ幸いである。

※本年の人類学関連学会協議会合同シンポジウムは、日本民俗学会が担当学会で、10 月の同会年会にあわせて開催する予定であったが、年会がオンラインでの開催となったため、期日を延期しオンラインでの開催となったものである。

【スケジュール】

13 時　開催挨拶　川島秀一（東北大学、日本民俗学会会長）
　　趣旨説明　市川秀之（滋賀県立大学、日本民俗学会）
　　司会　　永松敦　（宮崎公立大学、日本民俗学会）

13 時 15 分～13 時 40 分　「とあるチンパンジー集団における生と性」
伊藤詞子（京都大学、日本霊長類学会）

13 時 40 分～14 時 5 分　「乖離する性行為と生殖
―セクシュアルマイノリティによる生殖補助医療技術の利用実態から見た出産・子育て―」
新ヶ江章友（大阪市立大学、日本文化人類学会）

14 時 5 分～14 時 30 分　「現代人の寿命・老化とその性差」
村木里志（九州大学、生理人類学会）

14 時 30 分～14 時 45 分　休憩

14 時 45 分～15 時 10 分　「性差の民俗―胎児の性別占いと胎児観」
安井眞奈美（国際日本文化研究センター、日本民俗学会）

15 時 10 分～15 時 35 分　「人骨に現れる性差」
五十嵐由里子　（日本大学、日本人類学会）

15 時 35 分～15 時 50 分　休憩

15 時 50 分～16 時 50 分　総合討論
司会　才津祐美子（長崎大学、日本民俗学会）

16 時 50 分～17 時　討論終了・まとめ・閉会挨拶
徳丸亜紀（筑波大学、日本民俗学会）

「とあるチンパンジー集団における生と性」

伊藤詞子（京都大学、日本霊長類学会）

チンパンジーを含め野生霊長類の研究は、多くの場合、対象集団の識別と個体の識別が不可欠である。この個体識別をおこなう過程で、研究者は個性豊かな面々と出会うことになる。それぞれの個体の印象は、長期的に付き合い、様々な面を見る機会を積み重ねる中で、変化もする。それは、研究者側の当座の理解が間違っていたからという場合もあれば、その個体が成長や経験などによって実際に変化する場合もある。定量的なデータ分析の段階では、こうしたことは捨象されることになり、例えば、オスやメスといったカテゴリーに腑分けされ、平均化され、「チンパンジーのオスは〜」「チンパンジーのメスは〜」、といった言説が生み出される。もちろん、チンパンジー自身、オスとメスを区別はできるし、研究者が集約されたオスのデータやメスのデータを比較検討することも研究上重要なことではある。一方で、実際の日々の生活の中で、チンパンジーにとって相手がメスであるかオスであるか、ということがどれだけの意味を持つのかについて、十分に研究されてきたとは言えないように思われる。そこには、チンパンジーは訊ねたてみたところで語ってはくれないという問題もさることながら、性別カテゴリーをあまりに「自然」なものとして受け入れてしまっている人間が研究をおこなう、という問題も関わってくるように思われる。

本発表では、50 年以上の長期にわたって観察が継続されてきた、東アフリカ・タンザニア連合共和国西端に位置するマハレ山塊国立公園のとある集団の、性別ということでは収まりきらない多様なチンパンジー個体と彼ら同士の具体的なかかわりについて紹介する。その上で、その面白さを人間が理解・表現することの限界と可能性について、人間社会における性差にまつわる諸問題についての知見からご教示賜りたい。

「乖離する性行為と生殖」
―性的マイノリティによる生殖補助医療技術の利用実態から見た出産・子育て―

新ヶ江　章友（大阪市立大学、日本文化人類学会）

生殖補助医療（ARTs: Assisted Reproductive Technologies、以下 ARTs と記述する）をめぐる研究の進歩にともない、近年では異性間カップルのみならず、同性間カップルでも ARTs を利用した出産が行われるようになっている。発表者は、日本在住のセクシュアルマイノリティで出産・子育てを行っているある自助グループでのフィールドワークを 2018 年より開始した。このグループの特徴はレズビアンの参加者が多いことであるが、この調査から得たデータをふまえた上で、日本における性的マイノリティによる ARTs の利用実態の一部を紹介し、近未来において人間の性差がどのように変容する可能性があるのかを議論するための足がかりとしたい。

近年、同性婚を認めようとする動きが世界的に加速しており、日本においても同性間のパートナーシップ関係を承認する証明書を自治体が発行する動き（「同性パートナーシップ制度」）が広がっている。しかしその一方で、同性カップルによる出産・子育てについて議論されることはほとんどない。実際に同性カップルに子どもがいる例としては、ある女性が男性と結婚し子どもが生まれ、その男性との離婚後に別の女性とともにその子どもを育てるレズビアンカップルなどが存在する。また、レズビアンカップルが第三者の男性（ゲイやヘテロ男性、国内外の精子バンクの精子ドナーなど）からの精子提供によって子どもを作る場合もある。日本ではこのような同性カップル間での出産・子育てをめぐる法的規制がないため、出産後に親権をめぐる法的トラブルにみまわれることもある。近年、法学や生命倫理学の視点からこの問題に関する議論も行われているが、その一方で性的マイノリティの出産・育児の実態については日本では未だ十分に明らかとはなっていない。

性行為と生殖の関係は、生殖医療技術の進展によりすでに乖離しつつある。このことは、人間の性差の理解にどのような影響を及ぼす可能性があるのだろうか。レズビアンカップルによる ARTs を利用した出産の場合、現在は第三者の男性からの精子提供による妊娠・出産が主となっている。しかし実験室による研究では、女性の（あるいは男性の）皮膚などの細胞を用いて iPS 細胞を作り、精子（あるいは卵子）を作ることも可能となっており、まさに同性カップルでも自分たちの遺伝情報をもつ子どもを持つことが可能となっている。とりわけレズビアンカップルにおいては、第三者の精子提供を経ることなく出産が可能となる。もちろん多くの法的・倫理的問題について議論が必要なため、実際にこの技術が運用されるようになるかは慎重であるべきだが、現実問題としてこの技術が利用可能となった場合、まさに性行為は生殖の手段ではなくなる。このとき、男と女という性差そのものが疑問視されてくることにはならないだろうか。それとも逆に、男女の性差は別の形で強化されることになるのだろうか。この点についての若干の問題提起を行いたい。

「現代人の寿命･老化とその性差」

村木里志　（九州大学、日本生理人類学会）

Ⅰ　はじめに

演者は研究のテーマの一つとして、高齢期、すなわち老いの期間（老後）を健康的に暮らすための生活習慣や生活環境を研究している。ライフステージからみた場合、生理的な性差は月経、妊娠、出産、授乳の面から特に若･中年齢期に表れるが、高齢期においても様々な面で生理的な性差が表れる。中でも明確に表れる性差は寿命や罹患しやすい病気の違いである。その性差の背景には、高齢期を健康的に暮らすためのヒントが隠されていると考えている。

このような背景から本シンポジウムでは、寿命や高齢期の生理･老化の性差から､現代社会における高齢期の健康づくりを考察する。

Ⅱ　寿命と病気の性差

人間（ヒト）の寿命の大きな特徴は、他の動物と異なり、後生殖期の期間が極めて長いことである。多くの動物が生殖の役割を果たした後、寿命を迎える。しかし人間は女性の場合、閉経後にも長い生存期間がある。他方、男性の場合、生殖機能は高齢期まで維持されるものの、女性よりも早く寿命を迎える。

この間に見られる男女間の大きな違いは、罹患しやすい病気である。後生殖期のスタート時点となる閉経の時期には女性ホルモンの低下により骨粗鬆症、リウマチなどの病気が発症･進行しやすくなる。しかし、これらの病気の多くは直接死につながらない。他方、高齢期の男性は、女性と比べて癌の発生率や死亡率が高い。その違いは、飲酒や喫煙など生活習慣の違いによるものもあるが、性ホルモンなどの生理学的な要因も大きい。また、要介護等の原因をみると[1)]、男性の１位は脳血管疾患（脳卒中）であるが、女性の上位は認知症（1 位)、高齢による衰弱（2 位)、転倒骨折（3 位)、関節疾患（4 位）など慢性的な疾患が起因となるものが上位を占める。つまり、女性は長い寿命が故に慢性的な病気や障害と付き合うことになる。

では寿命や高齢期の病気の罹患になぜ性差が表れるのか。生物学的に決められているからか、生活習慣による影響なのか､もしくは若･中年期に果たされた性機能の副産物なのかはわからない。しかし、高齢期の健康づくりは男女一様に扱ってはいけないことは確かであろう。

Ⅲ　現代社会における老化への適応とその性差

高齢期の加齢による体力や歩行能力の低下は女性の方が大きい。著者らの研究でも自立度に大きく関係する膝伸展筋群の筋量は女性の方が高齢期の減少率が大きい[3)]。しかし、現代の日本の高齢者、特に女性がより活動･健康的になっており､一昔の高齢者層とは大きく変わってきている｡スポーツ庁の体力･運動能力調査結果[2)]からも、他の年齢層や男性と比較し、体力の向上がより顕著であることが確認できる。つまり、現代の高齢女性は、女性の高齢期の身体的弱点を克服しつつあるように見える。

高齢期（後生殖期）が長くなったこの時代、老化（Aging)による変化を受け入れ適応しながら生活することが求められている（サクセスフルエイジング)。現代人の高齢者がより健康的になっている理由は、心理（認知、意欲)、社会、経済、医療など様々な側面が関係している｡これらの影響それぞれに性差がある一方、そもそも老化に適応するという側面でも性差があるのかもしれない。

文献

1)厚生労働省（2016）平成 28 年国民生活基礎調査
2) スポーツ庁（2019）令和元年度体力・運動能力調査
3)福元清剛，石内愛美，中島弘貴，能登裕子，佐土原道人，福田修，村木里志（2018）日本人男女の下肢筋横断面積の加齢変化．日本生理人類学誌 23(3)： 87-95

「性差の民俗――胎児の性別と胎児観」

安井　眞奈美（国際日本文化研究センター、日本民俗学会）

いのちの誕生において、現代では胎児の性別が、超音波診断装置による鮮明な画像で判別できるようになっている。しかし、かつて胎児の性別は、人々が経験的に知り得た情報や俗信、民間信仰、占い、一般向けの出版物、絵画などを駆使して予測されていた。発表ではこれらを分析することにより、近代のはじめに、胎児の性別が妊娠中のどの段階であらわれると考えられていたのか、人々の胎児観について考察する。とくに、近世から一般の人々の間に流布していた、胎児の成長の様子を十ヶ月間の図で示した「胎内十月之図」から、胎内の視覚的なイメージを読み解いていく。近代のはじめに西洋医学を一般の人々に紹介する民間の医学書などを通じて、「胎内十月之図」が変容していく様子も分析したい。

幕末から昭和初期の全国の産育習俗を集めた『日本産育習俗資料集成』（恩賜財団母子愛育会編 1975）には、夫の年齢と妻の年齢による計算式で、胎内の子の男女の判別を予測する占いが数多く記されている。近世において、生まれた子どもが占いと異なる性別の「たがい子」である場合、「子返し」をするなど、性別を予測する占いは、当時の出生コントロールを実践するための重要な手がかりの一つであった。性別を知りたい欲求は、近世前期には性選択的間引きと、また近世末には間引きではなく堕胎と結びついていたことが指摘されている（沢山美果子 2005『性と生殖の近世』勁草書房，p. 148）。

各地の風俗誌にも、胎児の性別を占うさまざまな俗信が記載されている。1915 年に編纂された「奈良県風俗誌」と呼ばれる一連の史料には、訪問客の性別によって胎児の性別を占う俗信が紹介されており、「産み月の一日の早朝」や妊娠「五ヶ月の初日」に、最初に入ってきた人が男ならば男の子、女ならば女の子が生まれるとしている（安井眞奈美編 2014『出産・育児の近代―「奈良県風俗誌」を読む』法蔵館）。訪問客による性別占いは俗信ではあるが、妊娠五ヶ月の初日、産み月の一日など具体的な時期が示され、この頃には男女の性別が決まると考えられていたことが推測される。妊娠五ヶ月目は妊婦が胎動を感じたり、妊娠を公に示す岩田帯（腹帯）を巻いたり、身体的にも節目となる月であった。

胎児の成長の様子を 10 ヶ月の変遷で説いた「胎内十月之図」は、近世の女子の教訓書である『女重宝記』（苗村常伯）などによって流布し、近代には錦絵などにも描かれた。胎児の性別占いは、これら視覚的なイメージによる知識とも関連していたと考えられる。

発表では、近世から近代にかけての「胎内十月之図」による胎児の成長の可視化、性別に関する俗信や民間の医学知識を分析し、人々の胎児の認識について考察を加える。生まれる前に性別がわかるのが当たり前となった、現代とは異なる時代の、胎児の性別および胎児の意識について明らかにしたい。

「人骨に現れる性差」

五十嵐由里子（日本大学、日本人類学会）

ヒト（生物としての人間）は原則的には遺伝的に性差が決まっている。遺伝的性差はヒトの身体の形態に現れる。しかし，生物の身体形態には個人差がある。したがって，ヒトの身体形態から性差を判定することは簡単ではない。

しかし人骨の場合，骨盤や頭蓋の形態，身体のサイズなど，遺伝的性差が現れやすい部位がいくつかある。そこで，それらの部位の形態を観察すればある程度の精度で遺伝的性別が判定できる。

さらに，人骨の形態は，遺伝的に決まるだけでなく，後天的にも変化する。例えば人骨の形態は年齢によって変化する。また人骨には，生前の健康状態（栄養状態，病気など）や生活の様子（生業，生活習慣）がその痕跡を残す。女性の場合は妊娠出産経験も痕跡を残す。そこで逆にこれらの情報を骨から読み取ることにより，その人骨の性別，年齢，健康状態，生業形態を推定することができ，人骨が属した集団の寿命や健康状態や生業活動が推定できる。さらに性別情報を加えることにより，人骨集団の寿命や健康状態の性差，および性的分業の様子を推定することができる。そしてそれらの推定結果を最終的に「社会的性差」の推定に発展させることができる。

遺伝的性差の判定から社会的性差の推定にたどり着くまでには，様々な推定を重ねることになり，最終的に信頼できる推定を行うためには，個々の推定精度の向上が必要である。自然人類学者は個々の推定精度の向上に日々努めている。

当日の発表では，遺伝的性差，年齢，健康状態，生業形態が人骨に残す痕跡の実例，およびそれらを用いた生活復元の実例を紹介します。